戦争と儀礼

── 古代アンデスの事例 ──

渡部　森哉*

古代アンデス文明の始まりの指標は神殿であり、それは前3000年より前に遡る。神殿を中心とした社会が3000年近くという長い期間続き、神殿での儀礼、および神殿の更新が繰り返された。その間、神殿を中心とする大規模で複雑な社会が連続的に存在したにもかかわらず、組織的な戦争の証拠が殆どない、そして国家と言えるような中央集権的政治組織が成立しなかったという点が、他の地域の文明と比較して特殊である。形成期早期（前3000–前1800年）は土器製作開始前であり、農耕によりトウモロコシやジャガイモなどは大量に栽培されてはいなかった。トウモロコシ栽培の証拠が多く現れ始めるのは形成期中期（前1200–前800年）である。形成期末期（前250–前50年）には戦士像や防御的な建築物などの証拠が現れる。形成期の神殿が放棄された後、後2世紀頃に国家が誕生した。

目的が手段に内包されているため常に繰り返されるという点で、インカ帝国の戦争と形成期の神殿における儀礼活動との間に類似点があると言える。先スペイン期最後の15–16世紀に台頭したインカ帝国は、常に征服活動を行っていた。戦争を行うことで指導者の実力を示すこと自体が目的であり、戦争を通じて社会は拡大した。しかし武器は鈍器が中心であり殺傷能力の高い武器は使用されなかった。それは戦争の目的が土地や資源の確保ではなく、労働力の確保であったためである。また社会の基本である聖なる存在ワカの力を体現する王や首長が捕まったら戦争は終わった。

キーワード

戦争、儀礼、農耕、神殿、国家

目次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　形成期における戦争の証拠
　1　形成期早期
　2　形成期前期・中期・後期
　3　形成期末期
Ⅲ　インカ帝国における戦争
　1　インカ帝国、スペイン軍に敗れる
　2　戦争の目的と方法
　3　武器と戦術──石を投げるインカ王
　4　征服過程における戦争の事例
Ⅳ　考察

* 南山大学

Ⅰ　はじめに

生物の間には競争がある。種間競争もあれば種内競争もある。種内競争は多くの場合個体間、あるいは少数の集団間で行われるが、集団間で戦争を大規模に繰り広げてきたという意味で唯一の例外がホモ・サピエンスである。そして集団間の戦争の発展と、社会の複雑化、社会の大規模化との間には相関関係があり、いわゆる文明社会においては多くの場合、その初期の段階から戦争の証拠が認められる。戦争の結果として国家と呼べる中央集権的政治組織が形成された、あるいは政治組織の発展と戦争の展開には比例関係があると想定される（cf. Carneiro 1970）。本論文は、文明社会における戦争の意味と役割を古代アンデス文明の事例から考察することを目的とする。神殿、農耕、国家をキーワードとして論じる。

古代アンデス文明は、文字がないなどの点で世界の古代文明の中で例外的な事例としてしばしば捉えられてきた（大貫 1991; チャイルド 1957 [1936]）。アンデスでは社会の大規模化、複雑化が始まる前3000年頃の時点において、組織的な戦争の証拠は認められない。その後、およそ3000年間にわたり、神殿を中心に社会が統合されていたと考えられている。この時代を形成期と呼ぶ。形成期は神殿の特徴を基準に、早期（前3000–前1800年）、前期（前1800–前1200年）、中期（前1200–前800年）、後期（前800–前250年）、末期（前250–前50年）に時期区分される（加藤 1993）。組織的な戦争の証拠が現れるのは形成期末期であり、その後、国家と呼ばれるような中央集権的政体が後2世紀頃に成立する。文明形成初期に宗教的な建造物が重要な役割を果たしたことは、アンデスに限らず他の文明でも認められている（cf. 三宅 2015）。しかしアンデスでは、初期の神殿の建設から3000年もの間、国と認定されるような政治組織が出現しなかったことが特異である（渡部 2013, 2019）。3000年近くという長い期間にわたり、神殿を中心とした社会の大規模化、複雑化が連続的に進行したにもかかわらず、組織的な戦争の証拠が殆どない、そして国家が成立しなかったという点が、他の地域の文明と比較して特殊だと言えよう。そのため、その後に登場した国家、戦争のあり方も他文明と比較して相違点があるに違いない。簡潔に説明すれば、3000年間にわたって継続した前時代の形成期における神殿社会の特徴が、後の時代の社会展開を方向付け、拘束したのではないかと予想できる。

国家社会において戦争という形で競争原理が働いていることは、多くの文明社会で共通するが、アンデスの戦争の特徴はどのように整理出来るであろうか。アンデスの独自性をことさらに強調するのではなく、質的に違いがあるのか、あるいは程度の問題なのかを考えてみたい。

以下ではまずアンデス文明形成期に着目し、戦争の明確な証拠が認められない時代における神殿を中心とした社会が、どのような特徴を有していたのかを概観する。その後、先スペイン期の最後に登場したインカ帝国における戦争の特徴を検討する。本論文の目的は、アンデスにおける戦争の特徴を通時的に整理することではないため、形成期とインカ帝国期の間の時期の戦争については別論文を用意したい（cf. Arkush & Tung 2013; Bischof 2005; Scherer & Verano [eds.] 2014）。アンデス研究においてはインカ帝国をモデルとして先インカ期の状態を解釈するという方法がしばしばとられ、実際に形成期からインカ期にかけて、図像表現などに文化的連続性が顕著に認められる。アンデスにおいては人間集団の連続性が想定され、人間集団の置換が大規模に起こった証拠は確認されていない。そのためインカ帝国の事例を、先スペイン期の戦争の特徴を考察する基準としたい。

Ⅱ　形成期における戦争の証拠

1　形成期早期

1950年代に始まった日本におけるアンデス研究の主目的は、アンデス文明の形成プロセスの解明であった。そして現在まで多くの研究者が形成期研究に携わっている。日本におけるアンデス関係の論文でしばしば引用されるのが、「はじめに神殿ありき」という泉靖一の言葉である（泉 1966）。この言葉は、アンデス文明は神殿から始まったということを意味すると理解されてきた。しかしこれは学術論文で提唱されたのではなく、新聞記事に掲載された言葉であるため、泉が一体どのような意味を託したのかを詳細に読み取ることはできない。ここでは現在の研究状況に照らし合わせて、アンデス文明の初期の形成期がどのような時代であったのかを、戦争という視点から整理したい。戦争の証拠となる考古学データとして、防御的な立地・建築構造の遺跡、武器と防具を持つ戦士の図像表現、投石用の石の集合などの存在がある。

泉靖一は団長として1960年から、アンデス文明の

図１　本論文で言及する遺跡（▲遺跡名、●現代の町、筆者作成）

起源を探るという目的で、コトシュ遺跡（図１）の発掘を開始した（Izumi & Sono [eds.] 1963; Izumi & Terada [eds.] 1972）。そして最初の発掘調査で、先土器時代に神殿という公共建造物が存在したことを突き止めた。土器製作が開始される前であるから、煮沸という調理法があまり盛んではなかったということになる。土器は一般に農耕作物や植物質の食料と密接に結びついている道具であるから、農耕による食料生産があまり進んではいなかった時代に神殿が建設されたと解釈された。またコトシュ遺跡の発掘で確認されたもう１つの重要な事実は、神殿が繰り返し更新されたということである。ある時に神殿は埋められ、新しい神殿が古い神殿を覆うように、その直上に建設され、神殿の建設、更新自体が儀礼活動の一部となっていた（加藤＆関（編）1998）。この神殿更新と呼ばれる習慣は形成期後期まで続いた。この点は後の時代に証拠が現れるアンデスにおける組織的戦争の特徴を考える際にポイントとなる。

1960年代当時はゴードン・チャイルドの枠組に従って解釈する傾向がまだ強かった（チャイルド 1957:（下）46–52）。チャイルドの枠組みでは、農耕による余剰生産物が富となり、それを争って競争、戦争が生じると想定された。しかしアンデスにおいては、後の時代に主食となる作物であるジャガイモやトウモロコシが農耕によって大量に生産されていない時代に、そして農耕社会に一般に伴うとされる土器製作が始まる前に、神殿という公共建造物が建設されたという事実が、コトシュ遺跡の発掘で確認された。その事実はその後、他地域、他遺跡の調査でも追認された（Shady Solís 2006）。トウモロコシの証拠が多く登場す

るのは形成期中期以降である（Ikehara et al. 2013）。ジャガイモなどのイモ類も形成期早期から多く栽培され、食料基盤になっていたという証拠はない。

ムギ、コメ、アワ、トウモロコシなど穀物の栽培と貯蔵は結びつきやすい。しかしアンデスでは、そもそも余剰生産物を蓄積するような証拠が形成期の時代には希薄なのである。ただし、形成期早期から農耕は行われていたということは強調しておきたい。しかし主作物は、ワタとヒョウタンであり、直接食べるものではなかった。それらは漁撈の道具である網と浮きを作る原料であり、また衣服や器を作り上げる材料であった。ヒョウタンに関しては、アフリカから海を伝って流れ着いたか（Kistler et al. 2014; Lathrap 1977: 726）、あるいはアラスカを通って南下した先住民がその種をもたらしたと解釈されている（Erickson et al. 2005）。ワタは新旧両世界で個別に栽培化されたが、アンデスでの栽培化の時期は旧世界よりも古い。ワタは形成期早期という古い時代から栽培化されたため、アンデス文明を特徴付ける作物であり、例えばインカ帝国で実用化されたキープという紐を用いた記録装置の発明などに、ワタの使用例を見ることができる。形成期早期をコットン・プレセラミックの時代と呼ぶ研究者もいる（Pozorski & Pozorski 1987）。

アンデス地域のワタは学名 *Gossypium barbadense* で、日本語にすれば海島綿である。アジアにおけるワタである木綿（tree cotton; *Gossypium arboreum L.*）とは種レベルで異なる（日本綿業振興会 2001 [1956]: 16）。旧世界のワタは染色体の数が13で、アメリカ大陸のワタは26であるため、互いに交配できない。海島綿はかなり上質であるが、現在ではかなり少なくなっており、カリブ海でしか栽培されていない。この海島綿の栽培に関わる技術的な特徴を調べることで、形成期早期の農業の特徴を知る手がかりが増えるであろう。どの程度の労働の集約化が必要なのか、などがポイントとなろう。

余剰生産物という考え方で社会変化のすべてを説明できるわけではない。しかし経済活動の性格を変える要素の１つであることは確かであろう。すなわち食料生産に携わる必要がない人々を養うことが可能となり、そうした人々が別の活動に従事することが出来る。それがチャイルドの枠組である。もう１つの重要な特徴が、余剰生産物が富になるということである。そして富を求めて奪い合う。それが戦争を行う、戦争が大規模化する理由となる。また、限られた資源と人口とのバランスで戦争が生じることを説明することもできる（Carneiro 1970）。

しかしアンデス形成期早期における農耕の主要な作物はワタやヒョウタンであり、直接食料になるものではなかった。ワタを大量に栽培し、衣服や網を大量に製作することはできる。ところが形成期の間には、それが富に転化し、組織的な戦争の要因とはならなかったようである。その時期にはそうした物資を蓄え、守る倉庫のような施設は確認されていない。やはり農耕に伴う社会変化を考える際にポイントとなるのは、直接食料になる作物、特にムギ、トウモロコシ、アワ、コメなどの穀類の栽培、貯蔵であろう。

形成期早期には海岸地帯で多くの神殿が建設され、そこでは植物質の食料を農耕で十分に栽培せず、魚介類に依存していたという説が出された（Moseley 1975）。こうしたモデルを否定する論者は、栽培植物の証拠を見つけようとした（eg. Wilson 1981）。そして証拠は少しずつ見つかった（cf. Bonavia 2008）。たしかに農耕によってワタとヒョウタンだけを栽培することは考えにくいので、食料となる栽培食物はあってしかるべきである。しかしここで重要なのは、栽培植物の証拠の有無ではなく、その量と社会的な意味である。形成期早期にトウモロコシやジャガイモ、あるいはそれ以外の食料となる栽培植物が、大量に生産された証拠はなく、それを調理する土器などの道具も見つかってはいない。形成期前期から土器の製作が開始し、それと並行し、キャッサバなどの栽培植物の証拠がコンスタントに現れ始める（Tsurumi 2019）。形成期における共同労働の証拠は神殿の建設活動において明確に認められるが、形成期の神殿には倉庫が伴うわけではなく、大規模な灌漑の証拠、あるいは畑などの遺構も周囲に確認できない。農耕においてもある程度の組織的労働は始まっていただろうが、それはごく初歩的なものであったろう。そして戦争を組織的に行うだけの人口の多い社会単位はまだ形成されていなかったのではないか。形成期神殿の集大成と捉えられるチャビン・デ・ワンタル（図１）でさえも、形成期後期の段階で3000人と試算されているため（Burger 1992: 168）、形成期早期から中期にかけての各神殿の人口はより少なかったと推定できる。

現在のところ最古の神殿群はペルー北海岸南部のカスマ川流域などで確認されている（Fuchs et al. 2008, 2010）。そこでの重要な食料源は魚介類であり、それは貯蔵しにくいものである。一時的に大量に獲得する

ことがあってもそれを長期にわたって保持することは難しい。干し魚にすれば、保存することは可能であるが、それを保管する建物も見つかっていない。形成期早期には土器が見つかっていないので、煮るという調理法はメジャーではなく、魚を食べる場合は現在のペルーとボリビアにまたがるティティカカ湖の住民のように石焼きが主な調理法であったのであろう。魚介類と併せて人々は植物質の食料を摂取したと考えられる。神殿を建設し始めた形成期早期には大規模な戦争の証拠は見つかっていない。物資を貯蔵する明確な証拠も認められない。倉庫がある場合は防御が重要であるということを考えると、形成期においては、余剰生産物を巡る組織的戦争は行われていなかったということになる。また、資源と人口とのバランスから戦争を考えるためには、豊かな漁場のある海岸地帯でどの程度まで人口密度が高まった場合に緊張関係が生じるのかを検討する必要がある。

2　形成期前期・中期・後期

戦争の証拠の欠如は形成期早期に限定されない。神殿を建設・更新していた時代である形成期早期から後期まで、組織的な大規模な戦争の証拠は確認されていない。形成期早期から後期にかけての神殿は防御壁を伴わず、基本的にオープンな設計であり、だれでもアクセスできる。倉庫を伴う場合には、防御が重要な要素となるが、それが欠如している。中心部など特定の場に通じるアクセスがコントロールされることはあっても、外部に開かれている。またメソポタミアにおける都市城壁、あるいは華北における万里の長城などは、逆に人々が逃げ出さないことを意図していたというが（スコット 2019 [2017]: 26）、そうした人々が逃げ出さないようにするための壁を考える際の前提となる集住傾向はアンデスでは弱かった（Ramírez 2005）。

そして防御構造の欠如と並行して、武器と防具、それらの図像表現が殆ど見つからない。モチェ川上流のアルト・デ・ギターラス遺跡では、岩絵に盾のような円形の物体を持ち向かい合っている 2 人の人物の図像が確認されているが、武器を持っておらず踊っているようである（図 2）。カスマ川に位置する形成期中期のセロ・セチン遺跡では、石彫に武器（棍棒、斧）を持った人物が描かれているが、単独で表されており、集団間の戦争の証拠と見なすことはできない（図 3）。さらに斬首された首と解釈可能な図像はあるが、戦争の場面を描いた図像はないのである。長岡朋人がパコパンパ遺跡の出土人骨を事例として看破したように、形成期の神殿において暴力の証拠は存在する（Nagaoka et al. 2017, 2019）。しかしそれは集団で行う組織的戦争ではなく、単独の個体を対象とした行為であったのであろう。

図２　アルト・デ・ギターラス遺跡の石に描かれた絵
（筆者撮影）

図３　セロ・セチン遺跡の石彫
（筆者撮影）

形成期中期・後期の図像に頻繁に現れる道具は槍と投槍器であるが（Roe 2008）、それは戦争に使用されるものではなく、儀礼や狩りに用いられるものと考えられる。そして武器とともに盾のような防具がセットで描かれることはない。後の形成期末期以降に確認できる、防御壁や槍と盾をセットで持っている人物表現は、形成期早期から後期にかけての神殿においては確認されていない。

土器製作が始まる形成期前期から農耕による食料生産の証拠は増えていく。ペルーよりも古く、前3000年頃までにはエクアドル、コロンビア、ブラジルなどで土器製作が始まっている（Watanabe 2009）。ペルーにおける形成期前期の主作物はキャッサバである可能性が高く（Tsurumi 2019）、それが土器製作と共に導入された可能性がある。そして中期になるとトウモロコシの証拠が顕著になる。トウモロコシは、イネ科の植物であり、ムギやコメと同様、穀物であり、貯蔵が容易である。しかし形成期中期から戦争の証拠が増加するという状況は認められず、トウモロコシのための倉庫が見つかっている訳でもない。ちなみに後15–16世紀に台頭したインカ帝国においては上から見た平面の形が円形の倉庫がトウモロコシ用、四角形の倉庫がジャガイモ用であったことが判明しているが（Morris & Thompson 1985）、形成期中期における倉庫の存在、その特徴は明確ではない。

前800年頃にペルー中央海岸、北海岸の神殿の多くが、そして前500–前400年頃に北高地、中央高地の神殿が放棄された（加藤＆関（編）1998）。その際でも戦争の増加を示す直接的証拠は確認できない。前800年頃には大規模な自然災害があったとも推定されており（Elera 1993; Onuki 1993）、それを克服するためには、神殿の更新が必要であり、神殿のキャパシティーを超えたのかもしれない。つまり儀礼への動員力が増し参加者が増えすぎて、儀礼を制御できなくなり、神殿が放棄されたという可能性を指摘しておきたい。神殿の更新の規模が前回の更新よりも大きくなれば、必要な労働力も多くなる。災害が起こればそれまで行ってきた儀礼の規模にも変化が生じるであろう。災害を鎮めるために、以前よりも大規模な儀礼を企画しようとしても、それだけの物資と労働力を準備することが出来なくなれば、中止するか縮小せざるを得ない。神殿の放棄のような大きな変化は複数の要因が絡み合って生じたと考えられるが、海岸地帯における神殿の放棄の要因の1つは、各神殿の儀礼の肥大化であった可能性がある。

形成期中期から後期にかけて、戦争の要因の1つである、人口増加、社会規模の増大の可能性を想定することはできる。自然災害を契機とした、神殿における儀礼への参加者数の増加を指摘したが、この時期にすでに神殿の建設された地域における人口の絶対数も増えていたことも考えられる。形成期中期からトウモロコシの栽培の証拠が増加するが、収穫量の増大に伴い人口数が増加したと推定する場合、儀礼への参加人数、そして各神殿への帰属人数が増加したと考えることができる。それは神殿の規模の増大自体からも推定できる。ポイントは、ロバート・カーネイロが考えるように人口増大と資源の限界との関係のバランス（Carneiro 1970）、あるいは神殿を中心とした社会がどのくらいの人口までを包摂することが可能であったかであろう。

仮に人口増大とトウモロコシの収穫量の増大が比例するのであれば、他地域における事例と類似点を示すことになる。また、トウモロコシをはじめとする穀類は、食料となるほかに、酒の原料になるということが重要である。この点がアンデス文明の特徴を理解する際に特にポイントとなる。というのもアンデスにおいて特異に発達した土器の多くは、酒を入れる壺であったからである。形成期、モチェ文化、チムー文化の鐙形把手付き壺、形成期やシカン文化の長頸壺、ペルー南海岸のパラカス文化から発展しナスカ文化やワリ文化に継承された橋形把手付き双注口壺、ワリ文化のコップ形土器や大型鉢、インカ文化のアリバロス形土器など、文様を伴う装飾的な土器の多くは液体用、すなわち酒用の容器である。壺は形成期前期からあり、酒の製造は徐々に増えていったと解釈できる。つまりある時点で突然、社会変化を引き起こしたということではなく、後の時代の社会変化の伏線となったと言える。製造される酒量の増大は、神殿での儀礼の参加人数の増加とも比例するであろう。実際に形成期中期、後期には酒壺が盛んに製作された。そして前1200年頃から増え始めたトウモロコシ栽培は、その数百年後にあたる形成期末期に組織的な戦争が現れるという大きな社会変化を引き起こす1つの遠因となったとも言える。ただし、人口増大が起こる期間は、組織的戦争を伴う社会変化が生じる必要条件の1つではあるが、十分条件ではない。

3　形成期末期

戦争の証拠が現れるのは形成期末期であり、ペルー北海岸南部カスマ谷のチャンキーリョ遺跡（図4、図5；Ghezzi 2006）やペルー中央海岸北部ワウラ谷に位置するアカライ遺跡（図6、図7；Brown Vega 2009）などで見つかっている。また形成期末期のペルー北海岸で繁栄したサリナール文化などでは丘の上の防御的な立地に小部屋の集合が現れる（Brennan 1980, 1982）。形成期後期までは住居址の集合は確認できな

図４　チャンキーリョ遺跡の３重の壁
（筆者撮影）

図６　アカライ遺跡
（筆者撮影）

図５　チャンキーリョ遺跡の13の塔状構造物
（筆者撮影）

図７　アカライ遺跡
（筆者撮影）

いが、末期から集落の形態が明確になる。

それと併行して、形成期後期の終わりにはそれまで建設、更新が続けられてきた最後の神殿群が放棄された、あるいは大きく変質した。チャビン・デ・ワンタル、クントゥル・ワシ、パコパンパなど山地の神殿群、そしてランバイェケ谷のコリュ＝サルパン、ネペーニャ谷のセロ・ブランコなど、海岸地帯で形成期後期も更新を続けてきた神殿群である。形成期後期のこれらの神殿は、最後まで更新にこだわった事例である。逆説的であるが、こうした神殿から初期国家が連続的に成立したわけではない（渡部 2016）。チャビン・デ・ワンタルやパコパンパなど山地の神殿があった場所でも、その後国家は成立せず、むしろ周縁地域となった。形成期末期のカスマ谷で防御壁や戦士像の証拠が確認されているが、そこに国家が成立したわけでもない。アカライ遺跡の位置するワウラ谷も同様である。逆に、国家が成立したモチェ谷は、形成期中期末という早い段階で神殿が放棄された地域である。そして初期国家とされるモチェ社会（後100–後800年）では暴力の証拠が図像表現などに明確に現れる。

南海岸および、南高地の神殿群は形成期末期においても存続し続け、その後、別の社会展開をみせる。つまり神殿から連続的に次の社会形態へ漸次的に移行した。例えば南海岸ではパラカス文化からナスカ文化への移行は連続的である。その意味でナスカ社会は形成期社会の特徴をより直接的に継承している。

カスマ谷に位置するチャンキーリョ遺跡は、天体観測の場として知られているが、同時に戦争の証拠が認められる場所である（Ghezzi 2006; Ghezzi & Ruggles 2007）。丘の上にある 3 つの建物を防御壁が 3 重に取り囲んでいる。明らかに防御的な立地であるのであるが、そもそも何を守っているのかというと、神殿のような方形の建物である。周りより高くなっている丘であるが、水や食料の補給は極めて難しい。周壁の目的はなんであれ、人の出入りを制限する構造物がこの時期から建設されたこと、そしてそれを暴力行使の証拠として捉えることが出来ることは確かであろう。そして戦士の図像が施された土偶あるいは土器の一部が出土した。では、チャンキーリョが戦争の舞台であったとして、なぜこの時代に戦争が始まったのか。

カーネイロの有名な1970年の論文ではペルーの海岸地帯とアマゾン地帯が比較され、土地などの資源が限られている地域で、人口増加が起こった場合に戦争が起こると想定されている（Carneiro 1970）。では果たしてカスマ谷では農業資源が限られた状況で人口圧が高まり、戦争が起こったのであろうか。データを見てみると、あまり明快なパターンは認められない。モチェ期の最終期にはペルー北海岸では取水口付近、つまり川の上流域にガリンドなどの遺跡が分布するというパターンが認められ、水を巡る争いが生じたと予想できる。しかし形成期末期のカスマ谷やワウラ谷にそのような水を巡る争いがあったのかというと、川の上流に遺跡が集中するという証拠はない。人口が増大し、河川流域の土地が開発し尽くされて飽和状態になっているという説明もできない。形成期後期には、チャンキーリョ遺跡の位置するカスマ谷では、大規模な基壇型の神殿はなく、パンパ・ロサリオ遺跡やサン・ディエゴ遺跡のようにむしろ水平方向に広範囲に広がる分散型の配置の遺跡が認められる（Pozorski & Pozorski 1987）。では一体何が戦争を引き起こしたのか。

チャンキーリョ遺跡では3重に壁が囲んだ建造物のほかに、13の塔状構造物があり、それが天体観測に利用された最古の暦であるという説が出されている（Ghezzi & Ruggles 2007）。3重壁がある丘と13の塔がある丘は離れているが、同一遺跡として扱われている。暦に関する建物と3重の壁に囲まれた建造物は、宗教的な性格を強く示している。形成期後期までの神殿ではスペースやアクセスがある程度限られていたのに対し、チャンキーリョは広い空間に位置し、そこには数万単位の人々が集まることが出来る。そこを戦場と想定すると、かなり大規模な戦争となりうる。

チャンキーリョにおいて戦争を示唆する証拠はあるが、誰と誰が争ったのであろうか。同じカスマ谷内の他の集団、あるいはモチェなどの他の谷の集団といった外部集団を想定しても、それらの存在を示す物質的証拠は見つかっていない。そもそも集落は不明瞭であるが、カスマ谷の大規模遺跡を基準に想定すれば、パンパ・ロサリオ遺跡やサン・ディエゴ遺跡などが敵の候補となる人々の中心地となろう。ここではもう1つの可能性を指摘しておきたい。それはこれらの建造物を利用する同じ集団の成員に対して、つまり内部の人間に対する暴力の行使の正当化である。それは集団からの離脱を防ぐという効果もあったのかもしれない。実際、チャンキーリョの3重の壁は防御的であるが、同時に、それを見る者に威圧感を与えるほど巨大である。

戦争という用語を用いると、敵の存在が前提とされる。しかしアンデスでは外部の敵よりも先に、内部、つまりある同一集団内の人々の統制のために暴力の行使が正当化される段階があったと想定する方がいいのではないか。そのためここでは、集団間での争いを示す戦争と、集団内に向けられる暴力を便宜上分けて記述したい。形成期後期のチャビン・デ・ワンタル神殿での人口は最大でも約3000人と試算されており（Burger 1992: 168）、それよりも小規模な神殿では人口はより少なかったと想定できる。3000人程度までは形成期後期の儀礼の仕組みでコントロールできたが、それを超えた場合、別の方法、たとえば暴力行使によってコントロールする必要性が生じる。戦争というと集団間の争いを前提とするが、アンデスにおいては集団内を統御するための暴力、内部に向けた暴力が先行したのではないか[1]。それは、国家の成立モデルの、社会内闘争説（レンフルー & バーン 2007 [2004]: 485）と似たロジックでもある。後述するようにインカ帝国の戦争も、外部の集団を征服するための戦争はもちろんあるが、その後支配下に入った集団を統治するため、反乱を防止するための暴力行使も必要であった。考古学データの解釈のみならず、人間が構成する社会の性質は規模によって異なるということ、特に人口3000人を境として社会の仕組みがどのように異なるかを理論的に考察することも出来るであろう（cf. 小田 2009, 2010）。

3000人を超える人々が集ったと想定する根拠はどこにあるのか。3つの四角形の建物を囲む3重の壁は防御の証拠であるが、建て直されて大規模化したわけではない。形成期早期から後期までの基壇型の神殿は、複数回にわたる神殿更新の結果、大規模化した。それとは異なり、短期間に労働力を投下する仕組みが形成期末期にできあがった。チャンキーリョの3重の壁は更新の結果として大規模化したわけではない。最初から大量の労働力が投下されており、短期間にそれ

1　形成期末期には製造された酒量も増大し、儀礼の際に酒を飲み酔っ払う人々をコントロールするために暴力が正当化されたという可能性も想定できる。

を建設するために必要な労働力、期間を試算することが有効であろう。16世紀にペルー北部カハマルカ地方で実施された記録を基に、成人納税人口１人に対し、その妻、子供、老人を含む全人口は約５倍と推定できる（Watanabe 2005）。チャンキーリョの３重の壁を短期間で建設するためには600人の労働力では少ない場合、１世帯５人と計算して3000人以上の人口があったことを支持する状況証拠となろう。形成期後期の神殿チャビン・デ・ワンタルの推定最大人口3000人を超えることになる。仮に1000人の労働力を想定するのであれば、1000世帯で人口5000人ということになる。もう１つ考えなければならないのは、それだけ動員できる条件は何であったのかである。チャンキーリョに関しては、１つの可能性は13の塔を用いた天体観測であり、形成期後期までの儀礼とは質の異なる、より動員力のある儀礼だったのではないか。こうした議論を進めるためには協同（cooperation）や集合行為という概念などが有効であろう（Carballo et al. 2014 [2012]）。

次に、アンデス文明の最終段階のインカ帝国において戦争がどのような特徴を持っていたのかを確認し、形成期末期に始まった組織的戦争が最終的にどのように発達したのか見てみたい。

Ⅲ　インカ帝国における戦争

１　インカ帝国、スペイン軍に敗れる

インカ帝国は先スペイン期最後に登場した国である。しばしばアンデス文明の集大成として扱われるが、そのインカ帝国における戦争のあり方を整理することで、アンデスに共通する戦争の特徴を理解したい。その際、主にスペイン人が残した記録文書を用いるため、考古学データにもっぱら依拠して論じてきた形成期の戦争の議論の仕方とは異なる。

古代アンデス文明の始まりは、紀元前3000年以前に設定される。それから4500年以上経ち、フランシスコ・ピサロ率いるスペイン軍にインカ王アタワルパが捕まった。1532年のことである。これがインカ帝国の滅亡の年とされる。その１年後にピサロ軍は首都クスコに入城したが、それをもってインカ帝国の征服とする解釈もある。王を基準とするか、あるいは首都を基準とするかで征服の年は異なるが、後述するインカ帝国の戦争の特徴を考慮に入れれば、王の捕縛を基準とした方がわかりやすい。

図８　輿に乗るインカ王アタワルパとスペイン軍の邂逅
（無名征服者 1966 [1534]）

1532年11月16日がスペイン軍とインカ軍の決戦の時であった（ヘレス 1980 [1534]; 無名征服者 1966 [1534]）。場所はペルー北高地の行政センターであるカハマルカ。前日にはそこから5km東にあるバーニョス・デル・インカにおいてインカ王アタワルパは温泉につかり、滞在していた。そこには兵士も滞在していた。フランシスコ・ピサロは偵察を送り、相手の状況を把握した。

翌日、インカ王はカハマルカの行政センターの広場でピサロ率いるスペイン軍と謁見した（図８）。その場所は城などの建物の内部ではなかったが、これは地方に滞在中であったための特殊事情ではない。首都クスコにおいても、中心となるのは広場であり、クスコで邂逅したならば、おそらくハウカイパタという広場が謁見の場として設定されたであろう。そもそも広場で相まみえるのであるから、謁見というのは適切ではなく、例えば対峙など、対等な関係を示す用語がふさわしい。そしてドミニコ会のバルベルデ神父がキリスト教を布教しにきた旨を伝えたが、インカ王アタワルパは聖書に耳を傾けたが何も聞こえなかったため放り投げてしまう。それを見たピサロの「サンティアゴ」

というかけ声とともにスペイン軍が攻撃を開始し、インカ軍に勝利した。大将であるピサロは自ら敵将のアタワルパの乗っている輿に近づき、引きずり下ろしてしまった。そこで勝敗は決定した。

わずか168人のスペイン軍が、2万人以上のインカ軍に勝つことが出来たのはなぜか。これは、しばしばなされる問いである（ピース & 増田 1988; ロストウォロフスキ 2003 [1988]）。スペイン軍にはウマがいた、銃があった、など技術的な優位性がその要因として挙げられることが多い。あるいはインカの王族内で王位継承争いが繰り広げられていたためインカ帝国は一枚岩ではなかった、という説明がなされる。ここでは戦争のあり方そのものから考えてみたい。

スペイン軍とインカ軍の争いでは、インカ軍が銃声などに驚いて退散したということが語られる。何に驚いたのかというとおそらく戦いが始まったこと自体に驚いたのであろう。実はインカ軍は、スペイン軍と実際に戦ったというよりも、アタワルパが捕まってしまい、慌てふためいて逃げてしまったと説明するのが適当である。2万人対168人という数だけ見れば、実際に戦うはずがないと考えていたのであろう。マリア・ロストウォロフスキが指摘していることであるが、インカの人々はスペイン人に攻撃することなしに、太平洋からカハマルカまで通過させたのである（ロストウォロフスキ 2003 [1988]: 189）。

また、征服後、インカ軍はスペイン人に対抗し、クスコを包囲したのであるが、実際に戦火を交えたわけではない。そしてその後もインカ軍はスペイン軍と戦うチャンスはあった。しかし、待ち伏せするのであるが、実際に攻撃するわけではない。またスペイン軍はインカ族に対し反抗的な民族を味方につけた。インカ軍の戦争のやり方は、兵士を集め、その数で圧倒させるというのが適切な説明である。できるだけ敵を傷つけないこと、言うなればある意味で、反戦争こそがアンデスの戦い方の特徴なのである。

2　戦争の目的と方法

戦争は何らかの目的を持って行われる。人口当たりの食料が不足する、あるいは農耕のための土地が不足するなどの理由で戦争が起きる。ではアンデスの戦争はどのような要因で生じたのであろうか。少なくとも史料を読む限り、特定の資源を巡って戦争が起きたとは考えにくい。

戦争を常に行っていたことは確かである。インカ王は常に征服活動をして、首都クスコに長期間留まることはなかった。征服活動は暴力を伴う行為であった。そしてインカ帝国が拡張するにつれて、戦いの相手は外部ではなく内部にも現れ、征服された民族集団が起こす反乱を鎮圧するために暴力を行使した。

なぜ征服を続けたのか、これもしばしばなされる問いである。その理由について、さまざまな説明がなされている。インカ王の分割相続[2]のため（Conrad & Demarest 1984）、互酬性に基づく制度のため物資が雪だるま式に増加したこと（ロストウォロフスキ 2003 [1988]: 59）、などの説明がある。島田泉は、転がり出したら止まらない「雪玉効果」を生み出したと表現している（島田 & 篠田（編）2017: 174）。しかし少なくとも必要な土地や食料などが不足していたという状況を16世紀、17世紀の記録から読み取ることは難しい。そもそもアンデスでは人口密度は比較的低かった。フランクリン・ピースと増田義郎は「近代的な土地不動産の概念はアンデス世界にはなく、たしかに土地は食糧資源を生産する重要な場ではあったが、土地を占領することがただちに価値を持つとは考えられなかった。だいたいアンデス世界では、乗っ取ればすぐに役に立つ農地などあまりなかった。険しい山の斜面を切りくずし、石を積んで階段畑を丹念に築いたり、乾燥地に灌漑を施したりして、はじめて耕作が可能となった」（ピース & 増田 1988: 132–133）と説明している。

戦争を継続した1つの理由として、拡大政策を始めたパチャクティ、続くトパ・インカ・ユパンキ、ワイナ・カパックの3人のインカ王が、戦士としての属性を備えていたということがある（渡部 2010）。彼らは王位の正統性を示すため戦士としての実力を常に示す必要があった。それは王の選出の仕組みとも関わっている。最も有能で実力のある者が結果として王位に就いた。逆に言えば他に有能な者が現れればいつでも王位を奪われる危険性があったということである。そのため、例えばパチャクティ王は、兄弟のカパック・ユパンキなど、戦功を上げた者を身内であっても殺害した。ピエール・クラストルは未開社会における戦争の目的を、「名声への欲望」（クラストル 2020 [1980]:

2　インカ王は前王の財産を相続できず、新たに建物を建設し、畑を開墾する必要があった（シエサ・デ・レオン 1979 [1553]: 59）。そのため首都クスコ周辺に適当な土地がなくなり外部に拡大したという説である。

239）と説明しているが、インカ帝国における戦争にも類似点が認められる。戦争により実力を示すことが目的であるという意味で、戦争という方法が目的を内包していると言える。これは、戦争の自己目的化とも表現できよう。また戦争、征服活動を通じて労働力を確保することとなったが、逆に労働力を投下する対象としても戦争が行われた。このように考えると、目的があってそれを達成すれば戦争が終わるということではなく、戦争を行う機会を常に求め、作っていたということになる。王の実力を示すという目的を達成する他の手段があれば戦争はしなくてもいいのだが、代替できなかったため継続したのだと考えられる。現代でも祭りを実施するのは、それ自体が目的であると言え、代替不可能な手段なのである。換言すれば、同じ効果をもたらす他の選択肢が当事者に想定されていないと言えよう。

そのため、戦争の儀礼化という側面を指摘できる。儀礼であるから繰り返す必要があるのである。戦争は一部の人間に限定する儀礼ではなく、参加者数の多い儀礼である。アンデス文明は神殿から始まり、そしてアンデスの神殿は繰り返し更新された。形成期の神殿における儀礼、神殿更新も何らかの目的を達成する手段として行われたというよりも、神殿での儀礼、神殿の更新をすることによって社会が統合し活性化するという効果がもたらされた。その意味で方法と目的が互いに入り組んでいると言える。それは儀礼や祭りの特徴一般に当てはまるであろう。形成期の神殿更新という特徴の延長線上にインカ帝国の戦争を位置付けるとよく理解できる。兵士は専業化しておらず一般の人々から徴兵された。スペイン人の支配の軛から逃げ出したインカ軍はいったんクスコを包囲したのであるが、なんとしたことか、農作業が始まる季節になり畑に戻ってしまったのである。戦争に季節性があること自体が儀礼的側面を示している（ロストウォロフスキ 2003 [1988]: 113, 141–142）。さらに、トウモロコシという穀物農耕と結びついているということ自体、国家が現前化する機会が 1 年の中の特定の時期に集中したことを示している[3]（スコット 2019 [2017]: 14）。農耕を基盤としたインカという国家社会では、農業のサイクルと戦争が連動し、農閑期に戦争を行うという大まかな傾向があった。

インカ帝国の儀礼には、参加者を制限するのではなく、できるだけ多くの参加者を集めるという特徴がある（渡部 2014）。例えばインカ道の途中に配置された行政センターの広場が中心であり、そこには儀礼の際に多くの人々が集められた。多くの人々が参加することは、儀礼と戦争との間の共通点である。スペイン軍との戦いにおいても、2 万人も必要なかったと考えれば、無駄に人が多いと言える。インカ帝国における儀礼も戦争もインカ王によって組織され、動員されると想定される。形成期の神殿における儀礼については自発的な参加が想定されるが、インカ帝国における儀礼についても大量に酒が振る舞われるなど自発性を促す仕掛けがあった。

他の地域では食料や土地などの資源が奪い合いの対象となることがあるが、アンデスにおける富の概念は異なっており、労働力が富の基準であった（渡部 2017）。インカ帝国の時代でも人口密度は相対的に低い。トウモロコシ栽培などを国家事業として組織的に行っていたことも分かっているが、それは酒の原料として必要であり、つまり儀礼のための農耕という側面が強い。では戦争の結果をどのように決定していたのか。

インカ帝国の戦争において最も求められていたのは、人間そのものを支配下に入れインカ王の実力を示すことであった。植民地時代に残された先住民首長の遺言書などを見てみると財産として列挙されているのは何よりも人間である（Ramírez 1998）。物質的な財産への言及は殆どない。土地については、そもそも所有権はなく用益権のみであった。インカ王は死後もミイラとなって存続したが、それを管理する人々を他の王が相続することはなかった（シエサ・デ・レオン 1979 [1553]: 59）。もちろん他の文明社会においても労働力は重要であり、捕虜、奴隷などが記録されたが、インカ帝国においては、成人男性は基本的にすべて正式な納税民であった。そして、ある程度の人口密度になれば敵を殺す、あるいはある土地から追い出すという方法が戦争の選択肢として加わるが、アンデスの場合はインカ帝国の時代まで、武器は簡素な石製であり、殺傷能力の高い武器は生み出されなかった。

インカ王の支配下に人間をどんどん組み込むこと自体が重要であった。そしてその労働力を転化し、消費

3　ただし新世界では収穫祭の伝統がない（スコット 2019 [2017]: 124）。

するために様々な労働が課された。その1つが戦争の実施であり、ほかには道路の建設、橋の建設、織物の製作、などがあった。人間の確保と労働力の使用が組み合わさり、歯車が回り続ける仕組みとなっていたのである。もちろん戦争を通じた人間の確保は他の初期国家でも重要であった（スコット 2019 [2017]: 32–33, 132）。特に技術を有する人間集団が重要であった。しかしアンデスでは、奴隷という形で、新しい臣民を下位に位置付けるということはせず、成人男性は皆が正式な納税民となり対等な立場で横方向に配置され、十進法に基づき入れ子状に管理された。戦争の結果、新しい臣民が増加する仕組みであった。

そのためアンデスの民が、戦争の結果、スペイン人が黄金製品を血眼になって求めることが理解できなかったのである。物質そのものは、戦いによって奪い合う対象ではなかった。むしろ重要だったのは、冶金技術など、道具を作り出す技術を持った人々であった。

戦争のやり方についてもう1つ付け加えておきたい。アンデス研究やメソアメリカ研究では、図像表現などに表れる戦いの場面が、実際の戦争を表しているのか、あるいは儀礼的戦争を表しているのかという問いがしばしばなされる。ジョン・トピックとテレサ・トピックは、アンデスにおける戦争の儀礼性について論じている（Topic, J. R. & T. L. Topic 1987, 1997; Topic, T. L. & J. R. Topic 2009）。一方、ジョン・ベラーノは、モチェの人骨には殺傷痕があることからモチェの戦争を単に儀礼的戦争と考えることは難しいと主張する（Verano 2007: 115）。モチェに限らず、先スペイン期アンデスにおいては儀礼的戦争と実際の戦争の間にあまり明確な区別はないのかもしれない。インカ帝国における戦争も巨大な儀礼的戦争とみなすことができ、両者の間にある違いは、質的なものよりも、量的なものの方が大きい。

3　武器と戦術――石を投げるインカ王

では一体インカ帝国では実際にどのような武器を用い、どのような戦術で戦ったのであろうか。

図8をもう一度を見てみよう。フランシスコ・ピサロ一行がインカ王アタワルパと相まみえた場面を描いた図である（図8）。通常、謁見というと、王が訪問者を城や宮殿の中に招き入れる情景を思い浮かべるであろう。アジアやヨーロッパでは城壁や堀に守られた陣地の中に陣取る王の下へ、外部の者が入る。ところがアタワルパがいたのは首都クスコではなかった。カハマルカの行政センターが舞台であったが、そこにある建物の中にスペイン人を呼び入れたのではない。広場の中で謁見したのである。そして周囲には数万のインカ軍が囲み、その人々こそが壁になっていたと見ることも出来る。

このエピソードから、少数の敵に対して油断していたという考えもあるが、インカ帝国では組織的に隊列を組んで戦うということはなかった。軍隊が人数によって10進法で分けられていたが（Wedin 1965）、それは入れ子状の組織で、階層的なトップダウンの仕組みではなかった。通常の輪番制の仕事の延長として捉えられていた。アーサー・フェリルは組織的戦争であるかどうかの基準を陣形の有無としているが（フェリル 2018 [1985]: 17–18）、それに従えば、アンデスにおいて組織的戦争はなかったことになる。

インカ王は前線に立って戦った。ではどのように戦ったのか。17世紀初頭に描かれた輿に乗って移動するインカ王ワイナ・カパックの絵がある（図9）。ヨーロッパやアジアにおける戦争であれば甲冑を身にまとい、刀を手にする王の姿を思い浮かべるであろ

図9　輿に乗るインカ王ワイナ・カパック
（Guaman Poma 1987 [ca.1615]）

う。一方、インカ王は頭に房飾り、手には簡素な盾を持ち、そして武器としては投石器を持っているのみである。大規模な組織的戦争の証拠が現れ始めてから2000年近く経ったインカ帝国でもこの状態なのである。戦術がより高度に発達し、武器がより強くなったということはない。技術という面では、約1500年間、ほぼ同じ状態が続いた。

ヨーロッパでは石器時代から青銅器時代、そして鉄器時代へと移行した。それは、農業などの技術発展であると同時に、戦争用の武器の硬度が高まり殺傷能力が増大する流れでもあった。アンデスでは製鉄技術は実用化されなかった。そもそも技術があったとしても、少なくとも戦争という目的のためには鉄製武器は必要がなかった。武器はあまりに殺傷能力が高すぎてもいけない。旧世界でキリスト教徒同士の戦いでクロスボウの利用が禁止されたように、戦争には目的に応じて明示的な、あるいは暗黙のルールがある。形式が定まった行為や発話が儀礼だとすれば（Rappaport 1999: 24）、戦争にはある程度の儀礼性が伴う。しかしそれはインカ帝国をはじめとするアンデス諸社会に限定される特徴ではない。目的のために手段を選ばないという戦い方ではなく、あくまで手段が大事であるという意味で儀礼性の程度が高いという点がインカ帝国の戦争の特徴である。アンデスの戦争では労働力が最大の富であったため殺傷能力の高い武器は使用されなかったし、開発もされなかった。むしろ、鈍器を用いて大人数で行う戦争の形態であった。青銅器を作る技術はあったのであるが、武器や農具に用いられるよりも、儀礼用の装飾品を製作するのに用いられる場合が殆どであった。

なぜインカ王は投石器で石を投げたのかという問題は別稿で論じたいが、ここでは先インカ期において神官や社会的リーダーと思われる人物が槍と投槍器を手にしていたが、インカ王の場合、投石器に置き換わったという点を確認しておこう。アンデス高地ではオンダという投石器、あるいはボーラと呼ばれる先端に石がついた紐付きの道具が戦争に使用された。槍も使用されたが、武器の基本は投石器と棍棒である。アンデス山脈の東斜面のアマゾン地方の人々は主に弓矢を使用した。そして弓矢の分布範囲と投石器の分布範囲が重なり合わないという事例は、旧世界にも認められる（佐原 1982）。

特筆すべきは弓矢がアンデス高地や海岸地帯では戦争や狩猟に使用されなかったということである（Bennett 1948）。弓矢は主にアマゾンの人々が使用する道具であった。アンデス高地の事例としては、中期ホライズン期のコンチョパタ遺跡出土の大型土器があり、弓矢を持った人物が描かれている（Ochatoma & Cabrera 2001: Fig. 10）。インカ帝国の時代には弓矢はアマゾン方面から連れてこられた戦士が使用する武器であり（Guaman Poma 1987 [ca.1615]: 155 [155], 167 [169]）、アンデス高地、および海岸地帯の人々は弓矢を用いなかった。そのため、ワリ帝国の時代の土器に描かれている弓矢使いはアマゾンから連れてこられた戦士と筆者は推定しているが、ワリ帝国期にアンデス地域で弓矢が使用されていた可能性も検討する必要があろう。また形成期に弓矢があった確実な証拠は見つかっていない。

戦争に関わる道具は実に乏しい。アンデスでは大型の家畜はラクダ科のリャマとアルパカだけであり、それらに農作業のために車輪を牽かせることはなく、戦車もなかった。戦争の際も基本的には徒歩で移動であり、王などは輿で運ばれた。防具は盾があるのみである。頭を覆う防具としては、兜のようなものはなく、せいぜい金属製の板が付いた帽子があるのみである。小手のような金属製品が見つかることがあるのであるが、それは戦士が装着する防具というよりも、儀礼用品のようである。武器は鈍器が中心で、槍（投げ槍）、投石器、弓矢、棍棒、が主なものである。斧のような棍棒頭がついた武器はある。主に行われていたのは、遠くから石を投げるか、槍を飛ばす、あるいは至近距離から棍棒で殴るという戦法による戦いである。使用される武器は、最初は投石、次に槍、そして棍棒という順番であった（Bram 1941: 55; Las Casas 1948 [ca. 1559]: 21）。敵との距離に応じて武器が異なるという当たり前のことである。刀はない。戦車もない。クロスボウなどもない。もちろん火薬もない。

武器と同様に戦術も発達しなかった。そもそも戦術はなく、ただ兵士を多く集めるだけであった。記録文書で記述されているのは、軍隊がどのように組織されたのか、正確に言えば何人単位で組織されたのかのみである。納税システムと同様に10進法に従っていた。また軍隊においては3分制も用いられたという（ロストウォロフスキ 2003 [1988]: 138）。16世紀以降に記録されたインカ帝国の歴史では、インカ王の征服活動について華々しく語られるのであるが、実際にどのような戦術で行われたかは語られない。せいぜい兵の数と、要した期間について述べられているのみである。

あるいは非常に手強い相手であったことを強調し、その征服の成果を顕彰する。

アンデスの道具は基本的に人力である。動物や自然の力を利用する道具は発達せず、火薬などもなかった。結局、戦争のあり方も人間に依存し、質ではなく量で勝負したのである。川田順造は日本の道具の特徴として、人間への二重依存という考えを開陳しているが（川田 2010）、それはアンデスにも当てはまる。つまりそれぞれの道具が専門化するのではなく、各道具を人間が使いこなして様々な作業をした。効率的な道具を使用するのではなく、大変な作業も人間が時間をかけてした。そのため武器に特化した道具自体が発達しなかった。戦争に限らず労働では効率的な道具が使用されないため能率は悪く、時間をかけるか、人数を増やすことで対応した。

質ではなく量という考え方は、儀礼の評価のあり方にも認められる。儀礼や祭典などの質を評価することは難しいが、量的に評価することは容易である。どのくらいの人間が動員されたのか、どのぐらいの日数行われたのか、どれだけの物資が消費されたのかは測定可能である。戦争と儀礼を比較して考えると、戦いにおける勝ち負けは、武器の性能や戦術などではなく、むしろ量、つまり兵士の数でほぼ決まったとも言える。

インカ軍は地方の人々を征服する際には、実際に戦うのではなく兵を集めて圧倒するというやり方で行った。同じ規模の集団間では戦いが行われ、王、首長が捕まったら負けという方法で勝敗は決まった（ロストウォロフスキ 2003 [1988]: 176）。それぞれの集団は聖なる存在であるワカ（*huaca*）に護られていると考えられていた（Bram 1941: 63）。アンデスにおける共同体の基本はワカ崇拝である。祖先を共有する集団が基本であり、首長はワカの力を体現するものと考えられていた。そのため、首長が捕まるということは、ワカの神通力が劣っていたということであり、そこで戦いは終わった。ゲーム・オーバー、という言葉がふさわしいと感じるほどに戦いが儀礼化していた。そして、敵のワカの力が弱まるように祈ったのである（アコスタ 1966 [1590]: 下186）。

戦争が終わった後には、敵のワカである物体は捕虜として扱われた（図10）。インカ王は地方の民族集団を征服すると、そこの人々が崇めているワカである物体を捕虜としてクスコに保管した（Polo 1916 [1559]: 42）。それは支配を受け入れれば、その代わりに安寧を約束するという互酬性を示す習慣でもあった。

図10　スペイン軍に負けたインカ王と捕虜にされたワカ
（Guaman Poma 1987 [ca.1615]）

アンデスでは手術痕を伴う頭骨の事例があり、ある程度骨が再生しているため手術後生き延びたことを示している。手術技術が発達していたことが強調されるが、その1つの理由は鈍器で殴っても人が簡単に死なないためである。人が死ぬ殺傷能力の高い武器が使用されていれば、手術も必要ない。武器が弱いから中途半端になり、そのために手術するという選択肢が出てくる。人々に手術を施して、生かしておくことには儀礼的な意味もあったのであろう。つまり脳が損傷を受けた人物をわざわざ生かすということは、おそらく何か特別な意味をその人物に見立て、神聖視していたのではないか。これは儀礼的にワカを確保するという意味であったのかもしれない。

次にインカ帝国の征服過程における戦争のいくつかの事例を検討する。

4　征服過程における戦争の事例

インカワシは、ペルー南海岸カニェーテ谷にあるインカ帝国の行政センターである。これは「新しいクスコ」と呼ばれた遺跡である（Hyslop 1985）。この周辺

に生活していたグァルコと呼ばれる獰猛な民族集団を征服するための拠点として建設されたという。そしてグァルコの征服のために数年かかったが、征服という目的達成後にインカワシは放棄され、引き続き利用されることはなかった（シエサ・デ・レオン 1979 [1553]: 263–264; 2007 [1553]: 401）。まさに征服のためだけの拠点であった。この建設は、ある意味で過剰な投資であり、労働力を投下する対象であった。それは戦争が、人々を動員する対象であったことと同様である。しかもインカワシが防御的な構造になっていたかというとそうではない。他の行政センターと同様に、人々を集め儀礼を行い鼓舞し、労働を管理し、倉庫に物資を備蓄するための場所であった。しかしインカワシはインカ帝国の国境付近に位置しているわけではなく、帝国の領土内にあるため、なぜそのまま利用しなかったのかという疑問が残る。おそらく再利用する、効率よく利用するという発想自体がなかったのであろう。その証拠に、インカ帝国の行政センターは既存の建物を再利用して建設されたものではない。インカ道も基本的には新たに作られており、さらに平行して 2 本の道を通す場合もある。インカ帝国では儀礼で織物を燃やすことも報告されており、土器を破壊するという儀礼は先インカ期から認められている。作ること、壊すこと、放棄することは一連のプロセスなのである。

グァルコは、文書記録においてその獰猛さが強調されるのであるが、それを示す物質文化はよく分からない。戦争が集団の統合に結びつかなかったようであり、集団の規模が小さく、その指標が分かりにくい。エクアドルのカニャリ、ペルー北部高地東斜面チャチャポヤ、中央高地のワンカなど、インカ族に敵対した民族集団の名前が知られる。しかし、その物質的指標を整理して提示することは極めて難しい。これは戦争が激化した時代である後期中間期（後1000–後1450年）のアンデスにおける一般的な特徴である。逆に安定していた時代には集団規模が大きくなり、人間集団のまとまりを示す土器などの物質文化が分かりやすくなる。

ペルー中央高地のハウハ地方のワンカ族の中心地では丘の上に防御的な遺跡が集中しており、インカ帝国期よりもその前の時代に戦争が頻発していた（D'Altroy 1992）。インカ帝国の支配下では戦争は減少した。その前の後期中間期には小規模な戦争が慢性的に繰り返された。インカ帝国の支配下に組み込まれることによって、反抗できないように分散させられ、バラバラに他の地域に移住させられた。防御的な遺跡の存在などから先インカ期には同じような規模の集団間での戦いがあったことが予想できるが、インカ帝国期における戦争の証拠は皆無に近く、「インカの平和（Pax inca）」と説明される。

ワンカ族の建造物は丘の上に集中しているが、建物を次々に建てることに意味があったのかもしれない。1 カ所に物資や人を集中すればそこだけを守ればいいのだが、分散させることでリスクを軽減していると見ることもできる。あるいは建物の数で圧倒するという効果もあったのではないか。ハウハの事例は長期間籠もって守るということは想定されていないようであり、物資の補給の工夫が認められないため、短期間に使用する建物だったのかもしれない。恒常的に多くの人々が生活するためには適していない場所であるため、同時に全ての建物に人々が生活していたとは考えにくく、そこで生活する人々に必要な建物の数としては過剰である。

中央高地南部のアンダワイラス周辺にはチャンカという民族集団もいた（Bauer et al. 2010）。チャンカ族との戦争がインカ族の拡大路線を方向付けたと記録されている。しかしながら、その痕跡にまとまりがあるかというとそうではない。中央集権的社会組織を有していたと語られるが、そのような証拠はない。インカ族が自分たちの過去を正当化して、誇張するためにわざと相手を強く表象したのであろう。

またティティカカ湖岸の民族集団、ルパカとコリャも戦争をしていたと記録文書にある（シエサ・デ・レオン 2007 [1553]）。コリャの地域では、ケチュア語でプカラと呼ばれる砦と認定される防御的な立地の遺跡の増加が報告されている（Arkush 2011）。

エクアドル高地のカニャリ族については、インガピルカ遺跡において先インカ期の建物の上にインカ期の建物が載っているとされるが（Hyslop 1990）、このようなパターンは極めて珍しい。行政センターは新たに建設される場合が多いからである。

インカの拡大過程において、最も大規模な敵が北海岸の雄チムー王国であった。両者の間で戦争があったことは分かっている。そしてミンチャンサマンというチムーの王の名前も伝えられている。筆者が発掘調査を実施したタンタリカはインカ期以前のチムー文化の遺跡であり、インカ期に再利用されている（Watanabe 2015）。タンタリカは防御的な設計であり、東側、すなわち山側から来る人々に対する防御に適した設計で

あり、逆に海岸側には開かれている。他に戦争に関係する証拠としては棍棒頭の破片などがある。それと同時に入口と出口がある水路が 5 本以上はあり、儀礼的な設計でもある。そして肝心のチムー王国の首都チャンチャンでは大規模な戦闘の痕跡は確認できない。王が捕まった時点で戦いは終わったのであろう。

Ⅳ　考察

インカ帝国の戦争は、変化を促し、社会が大規模化することに繋がった。一方、後期中間期の戦争は、結果的に戦争が社会の安定、現状維持に繋がった。これはアマゾン地方における戦争と同様である。また戦争には、集団が分裂し小規模化する、あるいは滅亡するという結果になるケースもあろうが、今回はそのような事例を扱うことは出来なかった。

インカ帝国の拡大は、戦争が社会の大規模化、複雑化に繋がる事例である。資源獲得などの目的のために戦争を行い、その結果、社会が大規模化したのではなく、インカ王の実力を示すという目的のために戦争という手段に頼った。形成期には神殿更新が繰り返され結果的に神殿は大規模化したが、インカ帝国の戦争は、そもそも大規模化することが目的に内包されているという点が異なる。それは例えば宗教組織が信者を増やすメカニズムと類似している。いずれの側にとっても最大の富は労働力であるから、相手の労働力がほしい。それが戦争の結果が社会の大規模化に向かう条件となっている。勝敗の決め方は騎馬戦のようなゲームに類似しており、どちらが主導権を握るかを決定するために戦争が行われた。インカ帝国の場合、何らかの目的のために戦争をするというよりも、戦争をするために理由を探しているようであった。王位継承も、戦争する理由であったのであろう。

協同と競争、という分類に従えば（Carballo et al. 2014 [2012]）、戦争は競争の典型であるが、インカ帝国の戦争は協同、そして集合行為のあり方が展開したものと説明することが出来る。また、戦争を競争として捉えるにせよ協同と捉えるにせよ、目的が最初に設定されるのであるが、インカ帝国では戦争することによって実力を示すという意味で、手段に目的が内包されている。競争のみならず、協同という特徴が進み、戦争をする集団はどんどん大きくなった。兵士だけでなく、女性も同伴した（Murra 1986: 53; ロストウォロフスキ 2003 [1988]: 142）。繰り返すことで大規模化が進むという意味で、インカ帝国の戦争と形成期の神殿更新との間に類似性を見ることが出来る。またインカ帝国における戦争を巨大な儀礼と捉えることで、その特質をよりよく理解できる。他文明では政治と宗教がきっちり分かれる場合もあるが、アンデスでは儀礼の中に政治が埋め込まれていると言えるであろう。実際、戦争を行う際に、その行く末を託宣によって占った（cf. Sarmiento de Gamboa 1943 [1572]: 157）。

アンデスでは職業分化が進まず（渡部 2017）、戦争ではローテションで兵士の役割をこなしたため、恒常的に戦争に携わる職業的な戦士はなかった。また山地より海岸地帯で職業の専門化の度合いが高かったと想定されるが、戦士は海岸地帯からは徴収されなかった（ロストウォロフスキ 2003 [1988]: 133–134）。インカは臣民にトレーニングを施さないことで反乱防止をしていたのである。実力社会であるから、力をつけた戦士集団を創り上げてしまっては、逆にインカにとって脅威になり得たのである。

一方で、後期中間期の戦争のように、戦争が現状維持に繋がる場合もある。諸集団間の争いが特定の集団が突出しないように、均衡を保つために機能した。こうした社会の拡大化に抗する、国家成立に抗する動きについては、クラストルが指摘している（クラストル 1987 [1974]）。概して後期中間期の戦争は小規模集団間の戦争であった。記録文書の記述では、チャンカ、ルパカなど、大規模で強力な中央集権的社会と描かれているが、それはインカ王の業績を誇張するためであったのであろう。大規模社会間での戦争も、戦火を交えたとしても、王が捕まった時点で終了なので、それほどの被害は出なかったであろう。

いわゆるアンデス文明の範囲はインカ期に拡張した。先インカ期にすでにその範囲内に入っていた地域内では、征服はあたかも儀礼のように行われた。しかしその範囲外では実際の武力衝突があった。例えばエクアドル高地のカニャリ族、ペルー北高地東斜面のチャチャポヤ族はインカ族に対抗した民族集団として有名である。そして征服後も度々反乱を起こしたが、鎮圧されたとされる。インカ帝国の戦争には、すでに征服した集団の反乱を抑えることで、現状を維持する働きもあったのである。つまり戦争には社会的矛盾を覆い隠す機能があると説明できよう。

アンデスの場合、戦争の結果、国がどんどん大規模化した。あるいは現状維持のために特定の社会が突出しないように戦争が行われた。今回の分析で抜け落ち

ているのは、焼け野原になるような戦争である。それは災害のように社会に高度な負荷がかかることを意味する。災害にせよ戦争にせよ、ある社会が大打撃を受け、それが回復することを説明する概念としてレジリエンシーがある。しかし変化が生じるためには、レジリエンシーはむしろ拘束力、つまり、大規模化、複雑化を阻害する要因となる。逆に、戦争で焼け野原になり、元通りに戻らない場合に、新しい社会形態が誕生する、と考えることも出来る（渡部 2016）。そうすると戦争（社会への負荷）は、社会変化の方向性を判定するリトマス紙的な役割を果たすと見ることも出来る。戦争による疲弊、人口減少は一見、社会の複雑化と反比例するが、長期的に見れば、結果的に社会の大規模化・複雑化に結びつくということもあろう。長年に及ぶ戦争によって疲弊し人口が減少するという事態は、アンデスの戦争の結果としては想定しにくいが、今後そのような状況があったかを検討することは必要であろう。

最後に今後の課題を述べておきたい。戦争という制度の誕生によって、人間社会の認知の仕方が変化したことをどのように議論すれば良いのかという問題である。戦争が社会の大規模化に繋がる例から考え、例えばモニュメントの議論を援用することが有効なのかもしれない。それは身体と文化の共進化、モニュメント、アートなどの人工物によって、逆に人間の認知能力、あるいは身体そのものの進化が促進されたという視点と類似し、戦争という制度も人工物と見立てる議論である。

謝辞

匿名の査読者 2 名から極めて丁寧で建設的なコメントをいただいた。感謝いたします。本研究は科学研究費補助金（19H01396、19H05734、23682011、19682004）による研究成果である。また本研究は南山大学2020年度パッヘ研究奨励金 I-A-2の成果である。

参照文献

（日本語文献）

アコスタ、ホセ・デ
1966 [1590] 『新大陸自然文化史』増田義郎（訳）、岩波書店。

泉靖一
1966 「初めに神殿ありき——無土器時代に農業も」『朝日新聞（夕刊）』 9 月21日: 5。

大貫良夫
1991 「先史学から見た未開と文明」『「未開」概念の再検討 II』川田順造（編）、pp. 31–48、リブロポート。

小田亮
2009 「「二重社会」という視点とネオリベラリズム——生存のための日常的実践」『文化人類学』74(2): 272–292。
2010 「二重社会論、あるいはシステムを飼い慣らすこと」『日本常民文化紀要』28: 256–226。

加藤泰建
1993 「アンデス形成期の祭祀建築」『民族藝術』9: 37–48。

加藤泰建 & 関雄二（編）
1998 『文明の創造力——古代アンデスの神殿と社会』、角川書店。

川田順造
2010 『文化を交叉させる——人類学者の眼』、青土社。

クラストル、ピエール
1987 [1974] 『国家に抗する社会——政治人類学研究』渡辺公三（訳）、水声社。
2020 [1980] 『政治人類学研究』原毅彦（訳）、水声社。

佐原真
1982 「ヨーロッパにおける投弾研究——チャイルドとコルフマンの研究」『弾談義』八幡一郎（編）、pp. 277–312、六興出版。

シエサ・デ・レオン、ペドロ
1979 [1553] 『インカ帝国史』増田義郎（訳）、岩波書店。
2007 [1553] 『インカ帝国地誌』増田義郎（訳）、岩波書店。

島田泉 & 篠田謙一（編）
2017 『古代アンデス文明展』、TBS テレビ。

スコット、ジェームズ・C
2019 [2017] 『反穀物の人類史——国家誕生のディープヒストリー』立木勝（訳）、みすず書房。

チャイルド、ゴードン
1957 [1936] 『文明の起源』ねずまさし（訳）、上下、改訂版、岩波書店。

日本綿業振興会
2001 [1956] 『もめんのおいたち——綿畑から家庭まで』、財団法人日本綿業振興会。

ピース、フランクリン & 増田義郎
1988 『図説インカ帝国』、小学館。

フェリル、アーサー
2018 [1985] 『戦争の起源——石器時代からアレクサンドロスにいたる戦争の古代史』鈴木主税・石原正毅（訳）、ちくま学芸文庫。

ヘレス、フランシスコ・デ
1980 [1534] 「ペルーおよびクスコ地方征服に関する真実の報告」増田義郎（訳）、『征服者と新世界』pp. 435–556、岩波書店。

三宅裕
2015 「西アジアにおける神殿の出現――新石器時代の公共建造物をめぐって」『古代文明アンデスと西アジア――神殿と権力の生成』関雄二（編）、pp. 41–86、朝日新聞出版。
無名征服者
1966 [1534] 「ペルー征服記」増田義郎（訳）、『新大陸自然文化史』（下）、pp. 473–513、岩波書店。
レンフルー、コリン & ポール・バーン
2007 [2004] 『考古学――理論・方法・実践』池田裕・常木晃・三宅裕・松本建速・前田修（訳）、東洋書林。
ロストウォロフスキ、マリア
2003 [1988] 『インカ国家の形成と崩壊』増田義郎（訳）、東洋書林。
渡部森哉
2010 『インカ帝国の成立――先スペイン期アンデスの社会動態と構造』、春風社。
2013 「アンデス文明形成期の神殿社会」『人類学研究所研究論集』1: 33–52。
2014 「ワリ帝国の行政センターと地方統治――ペルー北部高地エル・パラシオ遺跡の事例」『古代アメリカ』17: 25–52。
2016 「崩壊と再生――古代アンデス諸社会の事例」『人類学研究所研究論集』3: 4–20。
2017 「アンデス的特徴に関する考察」『古代アメリカ』20: 57–78。
2019 「文明の誕生――古代アンデスの事例から」『史林』102(1): 7–39。

（欧文文献）
Arkush, Elizabeth N.
2011 *Hillforts of the Ancient Andes: Colla Warfare, Society, and Landscape*. Gainesville: University Press of Florida.
Arkush, Elizabeth & Tiffiny A. Tung
2013 Patterns of War in the Andes from the Archaic to the Late Horizon: Insights from Settlement Patterns and Cranial Trauma, *Journal of Archaeological Research* 21(4): 307–369.
Bauer, Brian S., Lucas C. Kellett & Miriam Aráoz Silva
2010 *The Chanka: Archaeological Research in Andahuaylas (Apurimac), Peru*. Los Angeles: Cotsen Institute of Archaeology Press, University of California.
Bennett, Wendell C.
1948 The Peruvian Co-Tradition. In *A Reappraisal of Peruvian Archaeology*. W. C. Bennett (ed.), pp. 1–7. Menasha: The Society for American Archaeology and the Institute of Andean Research.
Bischof, Henning
2005 Violencia y guerra en los Andes Centrales a través de las fuentes arqueológicas. In *Wars and Conflicts in Prehispanic Mesoamerica and the Andes*. P. Eeckhout & G. Le Fort (eds.), pp. 66–89. Oxford: Hadrian Books.
Bonavia, Duccio
2008 *El maíz: su origen, su domesticación y el rol que ha cumplido en el desarrollo de la cultura*. Lima: Fondo Editorial de la Universidad de San Martín de Porres.
Bram, Joseph
1941 *An Analysis of Inca Militarism*. New York: J. J. Augustin Publisher.
Brennan, Curtiss T.
1980 Cerro Arena: Early Cultural Complexity and Nucleation in North Coast Peru, *Journal of Field Archaeology* 7(1): 1–22.
1982 Cerro Arena: Origins of the Urban Tradition on the Peruvian North Coast, *Current Anthropology* 23(3): 247–254.
Brown Vega, Margaret
2009 Prehispanic Warfare during the Early Horizon and Late Intermediate Period in the Huaura Valley, Perú, *Current Anthropology* 50(2): 255–266.
Burger, Richard L.
1992 *Chavín and the Origins of Andean Civilization*. London: Thames & Hudson.
Carballo, David M., Paul Roscoe & Gary M. Feinman
2014 [2012] Cooperation and Collective Action in the Cultural Evolution of Complex Societies, *Journal of Archaeological Method and Theory* 21(1): 98–133.
Carneiro, Robert L.
1970 A Theory of the Origin of the State, *Science* 169(3947): 733–738.
Conrad, Geoffrey W. & Arthur A. Demarest
1984 *Religion and Empire: The Dynamics of Aztec and Inca Expansionism*. Cambridge: Cambridge University Press.
D'Altroy, Terence N.
1992 *Provincial Power in the Inka Empire*. Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press.
Elera, Carlos G.
1993 El complejo cultural Cupisnique: antecedentes y desarrollo de su ideología religiosa. In *El Mundo Ceremonial Andino* (Senri Ethnological Studies 37). L. Millones & Y. Onuki (eds.), pp. 229–257. Osaka: National Museum of Ethnology.
Erickson, David L., Bruce D. Smith, Andrew C. Clarke, Daniel H. Sandweiss & Noreen Tuross
2005 An Asian Origin for a 10,000-year-old Domesticated Plant in the Americas, *Proceedings of the National Academy of Sciences* 102(51): 18315–18320.

Fuchs, Peter R., Renate Patzschke, Claudia Schmits, Germán Yenque & Jesús Briceño
2008 Investigaciones arqueológicas en el sitio de Sechín Bajo, Casma, *Boletín de Arqueología PUCP* 10 [2006]: 111–135.

Fuchs, Peter R., Renate Patzschke, Germán Yenque & Jesús Briceño
2010 Del Arcaico Tardío al Formativo Temprano: las investigaciones en Sechín Bajo, valle de Casma, *Boletín de Arqueología PUCP* 13 [2009]: 55–86.

Ghezzi, Ivan
2006 Religious Warfare at Chankillo. In *Andean Archaeology III: North and South*. W. H. Isbell & H. I. Silverman (eds.), pp. 67–84. New York: Springer.

Ghezzi, Ivan & Clive Ruggles
2007 Chankillo: A 2300-Year-Old Solar Observatory in Coastal Peru, *Science* 315(5816): 1239–1243.

Guaman Poma de Ayala, Felipe
1987 [ca.1615] *Nueva Crónica y Buen Gobierno*. Madrid: Historia 16.

Hyslop, John
1985 *Inkawasi: The New Cuzco* (International Series 234). Oxford: British Archaeological Reports.
1990 *Inka Settlement Planning*. Austin: University of Texas Press.

Ikehara, Hugo, Fiorella Paipay & Koichiro Shibata
2013 Feasting with Zea Mays in the Middle and Late Formative North Coast of Peru, *Latin American Antiquity* 24(2): 217–231.

Izumi, Seiichi & Toshihiko Sono (eds.)
1963 *Andes 2: Excavations at Kotosh, Peru, 1960*. Tokyo: Kadokawa Publishing Co.

Izumi, Seiichi & Kazuo Terada (eds.)
1972 *Andes 4: Excavations at Kotosh, Peru, 1963 and 1966*. Tokyo: University of Tokyo Press.

Kistler, Logan, Álvaro Montenegro, Bruce D. Smith, John A. Gifford, Richard E. Green, Lee A. Newsom & Beth Shapiro
2014 Transoceanic Drift and the Domestication of African Bottle Gourds in the Americas, *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America* 111(8): 2937–2941.

Las Casas, Bartolomé de
1948 [ca.1559] *De las Antiguas Gentes del Perú*. Lima: Librería e Imprenta Domingo Miranda.

Lathrap, Donald W.
1977 Our Father the Cayman, Our Mother the Gourd: Spinden Revisited, or a Unitary Model for the Emergence of Agriculture in the New World. In *Origins of Agriculture*. C. A. Reed (ed.), pp. 713–751. The Hague: Mouton Publishers.

Morris, Craig & Donald E. Thompson
1985 *Huánuco Pampa: An Inca City and Its Hinterland*. London: Thames and Hudson.

Moseley, Michael Edward
1975 *The Maritime Foundations of Andean Civilization*. Menlo Park: Cummings Publishing Company.

Murra, John V.
1986 The Expansion of the Inka State: Armies, War, and Rebellions. In *Anthropological History of Andean Polities*. J. V. Murra, N. Wachtel & J. Revel (eds.), pp. 49–58. Cambridge: Cambridge University Press.

Nagaoka, Tomohito, Kazuhiro Uzawa, Yuji Seki & Daniel Morales Chocano
2017 Pacopampa: Early evidence of violence at a ceremonial site in the northern Peruvian highlands, *PLOS ONE* 12(9): doi.org/10.1371/journal.pone.0185421.

Nagaoka, Tomohito, Mai Takigami, Yuji Seki, Kazuhiro Uzawa, Diana Alemán Paredes, Percy Santiago Andía Roldán & Daniel Morales Chocano
2019 Bioarchaeological evidence of decapitation from Pacopampa in the northern Peruvian highlands, *PLOS ONE* 14(1): doi.org/10.1371/journal.pone.0210458.

Ochatoma Paravicino, José & Martha Cabrera Romero
2001 Arquitectura y áreas de actividad en Conchopata, *Boletín de Arqueología PUCP* 4 [2000]: 449–488.

Onuki, Yoshio
1993 Las actividades ceremoniales tempranas en la cuenca del Alto Huallaga y algunos problemas generales. In *El Mundo Ceremonial Andino* (Senri Ethnological Studies 37). L. Millones & Y. Onuki (eds.), pp. 69–96. Osaka: National Museum of Ethnology.

Polo de Ondegardo, Juan
1916 [1559] Los errores y supersticiones de los indios, sacadas del tratado y averiguación que hizo el licenciado Polo. In *Informaciones acerca de la Religión y Gobierno de los Incas*. H. H. Urteaga & C. A. Romero (eds.), pp. 3–43. Lima: Imprenta y Librería Sanmarti y Ca.

Pozorski, Shelia & Thomas Pozorski
1987 *Early Settlement and Subsistence in the Casma Valley, Peru*. Iowa City: University of Iowa Press.

Ramírez, Susan E.
1998 Rich Man, Poor Man, Beggar Man, or Chief: Material Wealth as a Basis of Power in Sixteenth-Century Peru. In *Dead Giveaways: Indigenous Testaments of Colonial Mesoamerica and the Andes*. S. Kellogg & M. Restall (eds.), pp. 215–248. Salt Lake City: University of Utah Press.
2005 *To Feed and Be Fed: The Cosmological Bases of Authority and Identity in the Andes*. Stanford: Stanford University Press.

Roe, Peter G.

2008 How to Build a Raptor: Why the Dumbarton Oaks "Scaled Cayman" Callango Textile Is Really a Jaguaroid Harpy Eagle. In *Chavín: Art, Architecture and Culture*. W. Conklin & J. Quilter (eds.), pp. 181–216. Los Angeles: Cotsen Institute of Archaeology, University of California.

Sarmiento de Gamboa, Pedro

1943 [1572] *Historia de los Incas*. Buenos Aires: Emecé Editores.

Scherer, Andrew K. & John W. Verano (eds.)

2014 *Embattled Bodies, Embattled Places: War in Pre-Columbian Mesoamerica and the Andes*. Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.

Shady Solís, Ruth

2006 America's First City?: The Case of Late Archaic Caral. In *Andean Archaeology III. North and South*. W. H. Isbell & H. Silverman (eds.), pp. 28–66. New York: Springer.

Topic, John R. & Theresa Lange Topic

1987 The Archaeological Investigation of Andean Militarism: Some Cautionary Observations. In *The Origins and Development of the Andean State*. J. Haas, S. Pozorski & T. Pozorski (eds.), pp. 47–55. Cambridge: Cambridge University Press.

1997 Hacia una comprensión conceptual de la guerra andina. In *Arqueología, Antropología e Historia en los Andes: Homenaje a María Rostworowski* (Serie: Historia andina 21). R. Varón Gabai & J. Flores Espinoza (eds.), pp. 567–590. Lima: Instituto de Estudios Peruanos.

Topic, Theresa Lange & John R. Topic

2009 Variation in the Practice of Prehispanic Warfare on the North Coast of Peru. In *Warfare in Cultural Context: Practice, Agency, and the Archaeology of Violence*. A. E. Nielsen & W. H. Walker (eds.), pp. 17–55. Tucson: The University of Arizona Press.

Tsurumi, Eisei

2019 Early Settlement and Cultural Landscape in the Tembladera Area of the Middle Jequetepeque Valley. In *Perspectives on Early Andean Civilization in Peru: Interaction, Authority, and Socioeconomic Organization during the First and Second Millennia BC*. (Yale University Publications in Anthropology 94). R. L. Burger, L. C. Salazar & Y. Seki (eds.), pp. 19–33. New Haven: Yale University Press.

Verano, John W.

2007 Conflict and Conquest in Pre-Hispanic Andean South America: Archaeological Evidence from Northern Coastal Peru. In *Latin American Indigenous Warfare and Ritual Violence*. R. J. Chacon & R. G. Mendoza (eds.), pp. 105–115. Tucson: The University of Arizona Press.

Watanabe, Shinya

2009 La cerámica caolín en la cultura Cajamarca (sierra norte del Perú): el caso de la fase Cajamarca Media, *Bulletin de l'Institut Français d'Études Andines* 38(2): 205–235.

2015 *Dominio provincial en el Imperio inca*. Yokohama: Shumpusha Publishing.

Wedin, Åke

1965 *El sistema decimal en el Imperio incaico: estudio sobre estructura política, división territorial y población*. Madrid: Insula.

Wilson, David J.

1981 Of Maize and Men: A Critique of the Maritime Hypothesis of State Origins on the Coast of Peru, *American Anthropologist* 83(1): 93–120.

War and Ritual:

A Case Study of the Ancient Andes

Shinya WATANABE*

Temple (also called ceremonial center) construction that dates back to around 3000 BCE is evidence of the origin of the ancient Andean civilization. Ancient Andean societies with temples flourished for close to 3000 years by repeating rituals at temples and renovating temples, which provided a source of stability. One unique aspect of Andean civilizations compared to other civilizations such as Mesopotamian is that during the long Formative Period (3000–50 BCE) their large-scale, complex societies with temples continued undisturbed without any evidence of organized war or any centralized political organization such as the state. During the Initial Formative Period (3000–1800 BCE), the production of pottery had not started yet and agricultural crops such as maize and potatoes were not yet cultivated intensively. The evidence of maize cultivation increased beginning from the Middle Formative Period (1200–800 BCE). The evidence of warriors and fortified sites appeared during the Final Formative Period (250–50 BCE) and the first state was formed around 2 CE after the abandonment of the temples of Formative Period.

There exists parallelism between the Incaic war and the ritual such as temple renovation of the Formative Period in that both were repeated constantly because those purposes are included in the means. The Incan empire that flourished during the latter part of the pre-Hispanic period (1400–1532 CE) engaged in continuous conquests of provincial societies. These conquests were waged for the purpose of war itself and for further territorial expansion. However, the arms used in these conquests were blunt instruments such as the head of a mace, which were not used for their lethality since the primary purpose was to get manpower, not terrain or resources. Typically, these wars or conquests ended with the capture of the king or chief who were viewed as the embodiment of the power of *huaca*, the sacred objects on which each society was based.

Keywords

wars, rituals, agriculture, temples, state

* Nanzan University